

---

# 鈴の音の少女

藤白竜胆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴の音の少女

### 【Zコード】

Z0114P

### 【作者名】

藤白竜胆

### 【あらすじ】

黄昏に棲まつ者の物語。

眠りへの誘いを司る、一族の姫は現在、現実逃避中。妙な力を持つてしまつたな、なんともんじやないのですが、姫さんに自覚はないようです。

朗らかな姫は、さては一族の冷酷さに染まるのでしょうか？

一話完結の短編集形式となっています。

(前書き)

protologue

また、取り込まれてしまったみたいね。

黒の少女は諦めに似た溜息を吐く。横に立つ青年は、無限ループの階段に混乱しているようだ。

『わ、どうしましようか。

少女は左手に握った鈴を、リン、と鳴らす。

いつも通り。ヘルパーとして勤務している病院から帰るついでいると、同僚でもある学生（実習生）の青年と鉢合せた。

あまり仲の良いほうではないと少女は思っている人とだが、愛想の良い彼女のこと。おしゃべりをしながら、階段を下つていった。

『ねえ、その鈴は何？』

先程から青年が疑問に思っていた、少女の手のなかにある鈴のことだ。

「護身用。」

リーン、と涼やかな音色を響かせ、田の高さまでもつてくる。鈴には複雑な紋様が細工されている。

『へえ？ なんで鈴なんかが護身？』

「それは、秘密。」

につこり笑いながら、これ以上は聞くなと田線で云つ。

本館の一階に差し掛かった頃、張り詰めた糸に触れたような感覚で

少女は立ち止まつた。

『へ~どうしたの?』

バツと少女は手摺りから下を覗き込み、顔をしかめる。

「あひやあ、やつぱ巣の中に取り込まれちやつたか。」

不思議そつて、青年も階下を覗き込む。瞬間、青年は凍てついた。

地下一階迄ある螺旋階段。それが、今や底の見えぬ延々と続く階段と化してこる。

『な、んだこりゃあ……』

唚然としたまま、田線を2階のフロアに移す。

『と、とりあえず他の階段を使おう!なんか気味悪い。』

タツと駆け下り、皮膚科受け付けの前に立つ青年。

「……無駄だと思つんだけど……。」

少女は溜息を吐きながら、青年の後を追う。その際、鈴の音を響かせることを忘れずに。

皮膚科を横切り、検査室の前の階段を下る。段々鈴が鈍く、耳障りな音色を奏で始める。

「……キタ。」

いつもの朗らかな少女とは到底思えない、けだるそうなうんざりした表情を浮かべる。巻き込まれた青年は、たまたもんじやないだろう。

ズツ、ズ、ザリッ……。

階下から響いてくる足音。職員なればいぞ知らす。こんな這いざるよつな音は、職員である可能性は既に等しい。

『……あ、キノ、さん？』

ふらふらと壁に手摺りに打ち当たりながら現れたのは、顔面蒼白の老婆。

「今朝、亡くなつた人ね。」

焦点の合わない瞳で老婆は一人を見つめる。

「橋を、渡りなさい。そもそもわたくしは……」

リーン！ 強く強く響き渡る鈴の音。

その音に、老婆の躰が、怯えるように、びくり、と震える。

ピキッ。

「……残留思念の強き者、氣を持つて人を殺めん、か。」  
罐の入つたプレスレットの石を眺めながら、少女は呟く。

早く、畢らせなければ。

この碎けた石は、わたしの身代わり。

「“トリニティ”」

砕けた石から光が現れ、白い死神をかたどる。白の鎌が舞踊ると、老婆の姿は消え失せた。

「“死”の呪縛の地に、眠りの音を。」

リーン。澄んだ涼しい音色の鈴が、舞う風に乗せて鳴り響いた。

「アレは自分の死を認めず、生きたい思いが強すぎて、察知・消去しようとした私に殺氣を放つたようです。しかし、浅はかだった。地鎮めの末裔に叶うわけがないのに。」

『ほつ、漸く一族の宿命を受け入れてくれるか。耀よ。で?一緒にいた青年は?』

「受け入れはしません。しかし、務めは果たす義務があります。ある人には、忘れて頂きました。」

『な、な、なんだアレ…さ、君も一体…』

「地鎮めの鈴。」

リーン。

鈴の音と共に、青年の意識がなくなる。

「…申し訳、ありません…。」

彼の頭に手を置き、そして軀を揺さ振る。

「幹久さん、幹久さんてば。起きてください、風邪引きますよ?」

『…う、ん?あれ、俺なんで…』

「どうしたんですか?踊り場なんかで蹲つちゃって。ビックリしましたよー。」

につこり笑つて云う少女に、彼は口を開く。

『なんか、変な夢見た気がするんだけど…なんだつたんだろ…』

少女は更に笑顔を被せる。

「病院ですから。変な夢を見ても、頷けるんじゃないですか?」

『ういって、立ち上がる。

「あ、帰りましょ?もう9時回りますよ。』

差し出された手を、青年が握ると、少女は唇の動きだけで“ごめんね”と呟いた。

(後書き)

十星司耀

（ほじづかようつ）

黒の使者。地鎮めの一族の次期当主。普段は朗らかで、愛されキャラな介護士。

十幹久悠

（みきひさはるか）

自覚が無いようだが、靈媒体質。リハビリ科にインターとしてお世話になっている模様。

準夜勤帰りに突発的に思いついた話。制作15分@電車内。

06/11/23

以前、己のHPに載せていたものになります。  
構想は出来ているけれど、次の話を仕上げるのがなかなか、時間が足りません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0114p/>

---

鈴の音の少女

2010年11月20日00時36分発行